

日本一かも、細い田んぼができたわけ

今坂柳二（文・イラスト）

誰が

めつけて

誰が言い触らしたもんやら、
あんとも不思議な田んぼの話が、
わしの耳に入ってきた。

三角だとか四角だとか

ナスだヒョータンだとか、

そんな形の田んぼは何処にだってあります。

その田んぼとは、奥行き二十間、

周りの田と違いませんで年寄りの

わしが騒ぎ立てるようなもんじゃない。

でも巾の狭いことには仰天だ。

六尺ちゆうから百八十センチ。

ウーンて手を広げると、

右の畦から左の小堀まで届いちまうんだ。

「そんな田んぼ、あるわけねえぞ、

トラクターで入ると回転できんじゃねえかい」

「田搔牛はどうすんだい、ん？」

隣の田に足をつち込むなどしたらドヤされんで」

「もつと困るなあシヨンベンだよ。

風の向きをよく考えてから、しなくちゃならん」

みんなに言われたわしは、

田主のミツ爺さんに話を聞きにいったんじゃ。

なにに、どうしてあんなに細い田んぼがあるんかって？

わざわざのお出でだ。それじゃあ、お茶でも入れんから、飲みなが

ら聞いてもらいましようかい。

ずいぶん昔のこと、わしのご先祖は親が分けてくれた田を埋めて家を建て、

新家に出た。

ところがある年の秋、途方もない洪水が押し寄せ、折角の家も屋敷も押し流されてしまった。洪水のおそろしさを体験したご先祖はこの地を

あきらめ、川から離れた地に移り住んだんじゃ。

本家からもらった屋敷。その入口にした六尺道。全て石の河原

に変わった。ですがご先祖も生まれながらの百姓じゃ。石を

転がす、砂を掻き退かす毎日だ。わしの先祖だから言うん

じゃねえが、立派なもんだ、たいしたもんだって、何時

も思っておりますよ。

土があれば草は芽を出し、稲は植えれば穂を垂れる。

幾年か後、元の屋敷は田んぼに生まれ変わった。

手を伸ばせば左右の稲穂に手が届く出入り径も、

耕して早苗を挿した。

いかがかな？ 日本一の狭い田かどうか、

そんなことはわしは知らん。でもな、一

尺の土地があれば苗を植える、そんな

百姓の心はなくしちゃあいかなぞ。

なあ、そうだんべ？

いまさかりゆうじ

狭山市笹井在住。二十四歳から俳句に

関わって、現在同人誌「つばさ」代表。

かたわら、昔ばなしの採集・採話を続け、

「龍じいの昔ばなし」以下九冊発行。

編集後記

猛暑に日照り、台風に火山・・・何か不気味な夏がすぎ、文化祭そして芸術祭といそがしくなります。今度の芸術祭は「高麗郡建郡 1300年」が冠に。会報 6月号で大野顧問に寄稿いただき、由来が分りました。私自身鶴ヶ島の生まれで、母は日高の高萩の出、近くに白鬚神社となれば、先祖は高麗人なのか興味あります。

芸術祭は会報で順次お知らせして行きます。

（高沢正夫）